

医療ソーシャルワーカーの地域・社会活動と

Grit 概念の理論的統合

—動的最適化モデルとしての領域特異型 Grit への再構成—

Theoretical Integration of Community and Policy Practice in Medical Social Work with Grit: Reconstructing Domain-Specific Grit as a Dynamic Optimization Model

高泉 一生（北星学園大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程／新見公立大学）

要旨

本稿は、医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）の地域・社会活動の重要性が高まる一方で、実践志向のミクロ実践への偏重からその実践が排除され得る現状に着目し、その実践継続と成果への到達を支える理論的枠組みとして Grit（＝やり抜く力）を位置づける。地域・社会活動の普及や定着に向けては実践知の標準化などの環境整備が重要視されるが、実践継続と成果への到達は環境条件と Grit の相互作用が肝要であり、Grit が引き出されない環境整備では地域・社会活動への“拱手傍観”が生じ得る。ただし、Grit は概念成立課題（概念重複・尺度脆弱性・予測妥当性の不安定さ）と倫理的課題（バーンアウトの助長・構造的問題の不可視化）を抱えてきた。そこで本稿は、領域特異型 Grit を内的要因と環境条件の相互作用のもと動的に最適化されるモデルとして再構成した「地域・社会活動 Grit」を提示し、MSW の実践課題と Grit の概念成立課題、倫理的課題を統合的に乗り越える理論的視座を示す。

Key Words : 医療ソーシャルワーカー, 地域・社会活動, マクロ実践, Grit, 領域特異型 Grit

1. 本稿の背景と目的

1.1. 本稿の背景

MSW の地域・社会活動は、MSW 業務指針の業務の範囲に明示され、「患者・家族等の多様なニーズに対応し、地域を支えるため、関係機関、関係職種等と連携及び協働し、地域共生社会の実現に向けた活動を行うこと」と説明される（厚生労働省 2026）。地域・社会活動はミクロ実践に留まらず、ミクロの課題をメゾ・マクロに反映させる実践として理論化されてきたものであり（田中 2008, 2010）、MSW が担うマクロ実践の中でも介入領域が広大な実践として、地域共生社会の実現に向けて重要性が高まっている。

しかし実践現場では、診療報酬制度によるミクロ実践の評価拡大や病床機能分化の影響、組織的な業務制約などによって、地域・社会活動が十分に実践されて

いないと指摘される（田中 2014; 加藤ら 2021; 林 2023）。そのため、地域・社会活動の普及や定着に向けて、院内承認の得方・多機関連携の工夫など実践知の可視化・共有が重要視されてきた（加藤ら 2021; 林 2023; 高泉・中田 2023; 林 2025）。こうした実践知の標準化といった環境整備は地域・社会活動の普及や定着に不可欠だが、地域・社会活動の必要性やそれへの意欲を見出せない MSW の存在が想定され（林 2023; 高泉・中田 2023）、MSW の動機づけなどの内面的要素に着目した環境整備が欠かせない。これは、MSW の実践志向にミクロ実践の援助技術追求への偏重が生じており（小畑 2021）、環境整備の方法次第では地域・社会活動を自らの専門的役割に内包できない可能性があるためである。地域・社会活動は政治性や不確実性から反復化・長期化し、成果への到達が遅れることに加え、ほ

ば必須業務であるマイクロ実践とは異なり業務遂行の任意性が高く、相対的に実践自体が負担となり動機づけが困難となる。よって、地域・社会活動は自らの守備範囲外として意図的に回避されやすい（堀越 2022）。ゆえに、地域・社会活動は実践の選択肢から排除されやすく、行政通知とは裏腹に実践現場では MSW が担う専門的役割としての位置づけが弱体化している恐れがある。こうした状況では、MSW の内面的要素への配慮を欠いた環境整備は既成の実践志向との不整合を招き、地域・社会活動を専門的役割として内包することへの抵抗を生じさせ得る。その結果、地域・社会活動の回避と排除から抜け出せずマイクロ実践への偏重が固定化し、その実践志向に適合する実践や環境が選択される可能性もある。これらは、本来的に MSW が担うべき役割を縮減させ、他職種との機能的差異や専門職としての固有性を曖昧にし得る。

したがって、地域・社会活動の普及や定着に向けては、環境整備の方法を検討するためにも MSW が地域・社会活動への関与を維持する内面的要素に着目する必要がある。この際、単なる動機づけへの焦点化では十分ではない。地域・社会活動は特有の実践困難性を伴う実践であるため、動機づけが困難で実践が意図的に回避され得る状況においても、いかに実践への関与を維持し、継続して成果に到達できるかという点が中心的課題として浮かび上がる。

このような課題に対して、Grit（＝やり抜く力）は（Duckworth et al., 2007）、動機づけの揺らぎに過度に規定されることなく長期目標への関与を維持して努力を持続する個人の内面的要素として捉えられてきた。近年、Grit は逆境下の行動継続と成果への到達を支える性質から、心理学領域を超えて教育・スポーツ・看護などの多様な分野への応用と検討がみられる。先述の地域・社会活動における中心的課題を鑑みれば Grit との適合性が考えられるが、ソーシャルワーク領域の Grit 研究の蓄積は乏しく、地域・社会活動の継続と成果への到達を支える Grit の体系的な知見は欠けたままである。もっとも、Grit を地域・社会活動に導入するにあたっては、その有効性を前提とするのではなく、地域・社会活動の実践困難性や Grit 概念の研究動向や課題、ソーシャルワークの価値や倫理を踏まえたう

で、導入のあり方を慎重に検討する必要がある。よって、MSW の地域・社会活動の文脈に Grit はいかに位置づけられるのかが重要な論点として浮上する。

以上を踏まえると、MSW の地域・社会活動の継続と成果への到達を支える理論的枠組みとして、Grit 概念の導入可能性を提示する意義が見出される。

1.2. 本稿の目的

本稿の目的は、MSW の地域・社会活動の継続と成果への到達を支える理論的枠組みとして Grit 概念を位置づけるとともに、その導入に伴う留意点を明らかにし、それを踏まえた導入のあり方を提示することである。具体的には以下を目指す。

- (1) MSW の地域・社会活動における実践困難性を先行研究に基づいて整理し、その構造的特徴を明らかにするとともに、Grit 概念との理論的接点を検討する。
- (2) 心理学領域における Grit 概念の研究動向を整理し、その概念特性と課題を踏まえて、ソーシャルワーク領域への導入に伴う留意点を明らかにする。
- (3) (1) (2) を踏まえ、MSW の地域・社会活動の実践文脈に適合する形で Grit 概念を再構成し、その導入のあり方を提示する。

2. MSW の地域・社会活動の実践困難性と Grit 概念との理論的接点

2.1. 実践困難性の構造：なぜ地域・社会活動は実践されにくいのか

本節では、先行研究に基づき MSW の地域・社会活動における実践困難要因を整理し、実践困難性の構造的特徴を明らかにする。そのうえで、Grit 概念への接続の理論的妥当性を論じる。

2.1.1. 制度的・組織的要因による内向き化と任意化

まず、診療報酬制度によるマイクロ実践の評価拡大や病床機能分化、在院日数短縮の政策圧力は、病院経営的にもマイクロ実践中心へと MSW の業務配分を強化する。反面、地域・社会活動には、制度的・組織的な評価がないことも指摘される（田中 2014）。こうした現状について、小畑（2021：79）は MSW 業務の歴史的変

遷から、MSW 業務は「政策、組織に後進することで内向きとなり、個別に現れている生活問題を社会の問題とする視点は薄められていった」と述べる。加えて、田中（2017）は近年の MSW 業務の多くが個別支援に集約するケアマネジメント型の手法で実施されており、ニーズアセスメントや資源調整が病院内のマイクロ実践に埋没しがちであると言及する。以上のように、マイクロ実践は制度的・組織的にほぼ確実に遂行が求められる業務として位置づくのに対し、地域・社会活動は制度的・組織的な評価も乏しく相対的に優先度が低くなり、業務の遂行が個々の MSW や所属組織の判断に委ねられて任意性が高くなる。

2.1.2. 情報提供に偏る役割期待と連携成熟度の不足

次に、社会保障の情報提供・申請支援が MSW の主要業務とみなされやすく、マイクロ実践の業務量が膨張している。高泉・中田（2023）は、社会保障の情報提供業務が MSW の役割として定着し、「国民一般」からの相談対応が雪だるま式に増え、重層的困難事例に介入する時間が削られる事態を指摘する。ここからは、他職種や地域住民による MSW の役割理解の偏りが更にマイクロ実践の業務量を増大させ、地域・社会活動に振り分けられるリソース不足に繋がることが推定される。また同報告では、多職種連携の成熟度が十分でないとして MSW が他職種の役割を部分的に背負い込み業務過多となり、地域・社会活動の実践が困難となることについても言及している（高泉・中田 2023）。

2.1.3. 実践構造的要因：政治性・不確実性に伴う反復性と長期性

加えて、地域・社会活動は複数機関・他職種・住民など多様な主体が関わるため、その展開は本質的に政治的過程である。利害や価値の異なる主体間で合意を形成し続ける必要があり、合意は単回で完了せず、継続的な調整・再交渉が求められる（Reamer, 2018）。そして、その実践は制度改正・感染症流行・地域の財政状況や文化などの外生要因の影響を受けやすく、不確実性を内包する。よって、初期計画は常に暫定的な性格をもち、小規模な試行→修正→再構築という反復的な実践が常態化する（Netting et al., 2012）。また、地域・

社会活動には社会資源の開発や連携体制の成熟に向けた実践が含まれ、ソーシャルアクションと不可分の関係にあるが（林 2023）、成果の可視化には年度単位から 10 年程度を要することも多く、短期間で成果が確認できることは稀である（高良 2017）。以上から、地域・社会活動は政治性・不確実性に起因する反復性と長期性を有する実践として理解できる。

2.1.4. 実践知の標準化の遅れ

さらに、以上の要因に対処するための地域・社会活動に関する実践知の標準化の遅れが指摘されている。林（2023）は地域活動における“病院内の了承を得る具体的な方法論や学びの場”の不足を指摘し、実践知の共有の欠如を地域活動の阻害要因として示唆する。さらに、加藤ら（2021）は MSW の地域活動が“標準化されていない”ことを述べ、活動の阻害要因として①所属機関の業務規程による活動制限、②退院支援中心の業務割当、③人員不足、④MSW 独自の役割の曖昧化を列举する。逆に促進要因としては、院内外の理解・協力や多職種・住民との連携促進、MSW 独自機能の確立、病院内での役割確立を挙げる。ここで重要なのは、提示された促進要因を系統的に生み出す方法や手順が共有されていない点である。こうした状況では実践の方法が十分に共有されず、同様の活動を他の MSW が再現しにくいいため、地域・社会活動の実践が困難となる。すなわち、実践知の標準化の遅れは他の困難要因と同列に並ぶというよりも、他要因に適切に対処していく方法や手順が共有されないために、結果として他要因の影響を増幅し、その解消を困難にする要因といえる。

2.1.5. MSW の内面的要因

その他、これらの環境的・構造的要因に対して、MSW の内面的要因も指摘されている。林（2023）は、地域活動の阻害要因として MSW が地域活動の「必要性を感じていない」ことを挙げる。また、高泉・中田（2023）も地域活動の抑制要因として「活動意欲の未形成」を提示している。これらの指摘は、地域・社会活動の継続や成果への到達が環境条件のみならず、地域・社会活動への動機づけに依存することを示唆する。動機づけは行動の価値認知と達成可能性の見通しによって規定

されるが (Wigfield & Eccles, 2000), MSW の地域・社会活動は既述の通り短期間で成果に到達せず, 活動の価値を実感しにくい側面がある。また, ミクロ実践との両立負担や実践に振り分けられるリソース不足がある中で, 多様な主体間の調整や合意形成を要する政治的過程に取り組むとなると成果の見通しも立ちにくい。その結果, 地域・社会活動への動機づけは困難となる。ただし, こうした状況下でも MSW は地域・社会活動を全く意識していないわけではない。堀越 (2022: 64) は, MSW がミクロ実践に追われる中で社会の問題に目を向けつつも「自分の守備範囲はそこまで広がらないといった納得をつくり」, 地域・社会活動を意図的に回避する過程を描写している。すなわち, MSW が環境的・構造的条件に適応するためにミクロ実践への没頭を正当化している可能性も否定できない。そして, 「制度や社会を変えることができない代わりに, 患者や家族を適応の名の下に変えよう」とする方向に進み, 「医学モデル的指向が強い医療分野ではそのようなソーシャルワーク実践が臨床的であると称されたりもする」ため (堀越 2022: 64), MSW の実践志向には「ベストインタレストな意思形成を支援する」ミクロ実践の援助技術追求への偏重が生じる (小畑 2021: 76)。このように実践志向がミクロ実践に偏重すると, 地域・社会活動への関与を求められたとしても, 既存の認知的スキーマ (Neisser, 1976) や専門職としての自身の役割認識やアイデンティティ (Stryker & Burke, 2000) との不整合として認識され得るため, 受容ではなく歪曲や回避, 抵抗を伴いやすい。総じて, MSW の内面的要因は単なる動機づけの問題ではなく, 既存の実践志向・認知的スキーマ・アイデンティティとの不整合を含む心理構造に起因し, 地域・社会活動は実践の選択肢から排除されやすい。

2.1.6. 実践困難要因の総括：環境的・構造的要因と MSW の内面的要因の交錯

ここまで確認してきた環境的・構造的要因と MSW の内面的要因は, 複合的に交錯しながら実践困難性を形成していると想定できる。例えば, 政策としてミクロ実践の評価拡大や在院日数管理の方向性が強まると, ミクロ実践の業務量が増加し, 地域・社会活動に割く

時間が削減される。その際, 地域・社会活動の実践方法が共有されていなければ, 実践への着手が困難となる。加えて, 2.1.5 で示したように実践志向がミクロ実践の援助技術追求に偏重し, 地域・社会活動が実践の選択肢から排除されれば, 実践の継続や成果への到達は到底望めない。このような各々の実践困難要因の相互作用による結果として, 地域・社会活動は実践の継続に至る条件が整った一部の MSW のみに依存して成立し, 属人的な実践状況にあると捉えられる。

2.2. Grit 概念との理論的接点：地域・社会活動の普及や定着に向けた Grit への着目

以上のように, 環境的・構造的要因と内面的要因の交錯から地域・社会活動の実践困難性が生じている点を踏まえると, その実践の普及や定着に向けては, まず環境的・構造的要因への対応が不可欠となる。

具体的には, (a) 院内の合意形成, (b) 外部資源 (財団助成・職能団体ネットワーク) の活用, (c) 多職種との役割分担の再設計, (d) 活動成果の可視化といった実践知の共有が要となる (高泉・中田 2023)。これらを体系的に整理し, 院内承認を得る手順や学習の場として確立すること, すなわち地域・社会活動に関する実践知の標準化は, 実践の再現性を高めて属人的な実践状況からの転換を図る上で重要な方策となろう (加藤ら 2021; 林 2023; 林 2025)。

ただし, 2.1.5 で示したように, 地域・社会活動は実践志向・認知的枠組・アイデンティティとの不整合を含む MSW の内面的要因によって実践の選択肢から排除されやすい。よって, 地域・社会活動の普及や定着に向けては, 実践知の標準化といった環境整備においても, こうした内面的な排除圧力に着目する必要がある。同時に, なぜ内面的な排除圧力の下でも実践継続や成果への到達が可能となるのか, そのメカニズムの説明が欠かせない。地域・社会活動は反復性・長期性・任意性を伴う実践であり, こうした内面的な排除圧力に対抗して実践への関与を維持し続ける内面的要因が求められる。この際, 逆境下における行動継続と成果への到達を支える内面的要素である Grit は有効な理論的枠組みとなる。なぜなら, Grit は「長期目標に向かう情熱と粘り強さ」と定義され (Duckworth et al., 2007),

地域・社会活動の中核的要素である“社会資源の開発”（日本MSW協会2026）を前進させる「熱量」「粘り強さ」「解決に向けて目をそらさない力」（鈴木2022）と概念的整合性を有し、内面的な排除圧力に対抗する内面的要因になり得るためである。加えて、イノベーション普及理論（Rogers, 2003）や組織のルーティンに関する議論（Perrow, 1967）を踏まえても、新たな実践業務の普及や定着は、実践の継続と成果の蓄積を通じて進展すると考えられる。したがって、地域・社会活動の普及や定着を図るためには、実践継続と成果への到達ならびにそれらを支える要因の解明が重要となり、Gritへの着目が要請される。

実際、行動継続や成果への到達の説明にはGritの関与が繰り返し報告される（Datu, 2021）。すなわち、実践行動の継続や成果への到達には制度的誘導や実践知の標準化といった環境整備のみならず、Gritが中核的な役割を果たすことも想定される。先述のMSWの内面的な排除圧力を踏まえれば、MSWのGritが引き出されない環境整備では「実践可能でも実践されない」という地域・社会活動への“拱手傍観”が生じ得て、その普及や定着が阻まれる懸念がある。MSWのGritが乏しい場合には整備された環境が活用されず、“宝の持ち腐れ”にもなり得る。

総じて、MSWの地域・社会活動の普及や定着に向けては、逆境下でもその実践への関与を維持し続ける内面的要素であるGritへの着目が重要な課題として位置づけられる。ただし、Grit概念の地域・社会活動への適用にあたっては、その有効性を前提とするのではなく、ソーシャルワークの価値や倫理との整合性などの慎重な検討を要する。したがって、本稿は単純なGrit概念の導入ではなく、MSWの地域・社会活動の実践文脈に適合する導入のあり方を模索する。

3. Grit概念の研究動向：定義・測定／弁別／課題／領域特異化／ソーシャルワーク領域導入の留意点

3.1. 定義・測定（2因子モデル）と関連概念との弁別

GritはGuts（度胸）、Resilience（復元力）、Initiative（自発性）、Tenacity（執念）の頭文字に由来し、「長期目標に向かう情熱と粘り強さ」と定義される（Duckworth et al., 2007）。逆境下における継続や成

果への到達を支える内面的要素であり、12項目の自己評価尺度に対する因子分析から「情熱（興味の一貫性）」と「粘り強さ（努力の持続）」の2因子が抽出される（Duckworth et al., 2007）。両因子は相関するが異質性を持ち、合算得点は挑戦的状況でのパフォーマンスをより良く予測する（Duckworth & Quinn, 2009）。これはGritを2因子の合成的特性とみなす妥当性を支持する。一方、近年は3因子目として「状況適応性」を含める議論もあるが（Datu et al., 2016）、「状況適応性」は独立因子として扱う方が適合度は高く（Disabato et al., 2019）、Gritに関連する基盤的要素として位置づけ得る（Feraco et al., 2023）。Grit尺度はスポーツや教育など様々な領域で行動継続と成果との関連を説明するために用いられてきた。

Resilienceと共通点を持つが、Resilienceがストレスやトラウマからの回復を主とするのに対し、Gritは逆境を踏まえても達成・成功に向けて努力を続ける点に特徴がある（Stoffel & Cain, 2018）。また、Gritはその性質から、動機づけ（Motivation）と関連する概念とされる（金野・柳原2019）。ただし、動機づけは一定ではなく状況に応じて変化・低下・消失する可能性があり（吉川2016）、そのエネルギーの強さや持続性、方向性が変動するものとして捉えられてきた（水野ら2008）。すなわち、動機づけは行動の開始や方向づけを説明する重要な要因だが、その維持や継続を常に保証し得ない。一方でGritは、上位目標に対する長期間の関与を維持し努力を持続し（Duckworth & Gross, 2014）、短期的な動機づけの変動とは異なる時間スケールで理解される概念である。さらに、Gritの類似予測因子として誠実性（Conscientiousness）と自己統制（Self-control）がある。達成意欲や責任感を示す誠実性は、職種を問わず職務パフォーマンス予測する因子である（Barrick & Mount, 1991）。誠実性はGritと高い相関関係にあるが、Gritは長期目標への持続的関与という点において追加的な説明力を持つとされる（Duckworth et al., 2007）。また、自己統制は目標達成のため衝動を抑制する力であり、学校成績・収入・職業達成を予測する（de Ridder et al., 2012）。自己統制とGritの相関は高いが、自己統制が短期的成果に有効であるのに対し、Gritは長期的成果へのより強い予測

力を持つ (Duckworth & Gross, 2014). 総じて, Grit は誠実性・自己統制と関連しつつも, 長期的成果の予測力において独自性が指摘される (竹橋ら 2019).

3.2. Grit の概念成立課題と“領域特異型 Grit”の台頭

Grit は長期目標の成果予測において意義が見出される概念だが, その成立に関しては (a) 誠実性との構成概念の重複, (b) 尺度構成上の脆弱性, (c) 領域を超えた予測妥当性の不安定さといった課題を有している.

まず, (a) 構成概念の重複に関して, Credé et al. (2017) はメタ分析の結果から Grit と誠実性における名称の違いによる誤謬 (Jangle fallacy) を述べ, 同一の構成概念である可能性を指摘する. 次に, (b) 尺度構成上の脆弱性については, Grit 尺度における長期的目標に取り組む「情熱 (興味の一貫性)」の測定の弱さが指摘されており (Jachimowicz et al., 2018), 尺度構成の妥当性に課題が残る. また, (c) 予測妥当性の不安定さは, Credé et al. (2017) と Lam & Zhou (2022) が Grit と学業成績との相関の弱さを報告する. すなわち, Grit の予測力は状況依存的で領域全般に通ずるものではないと示唆される. これらの概念成立課題は, Grit を領域不問の全般的な内面的要素＝“一般 Grit (General Grit)”として扱うことの限界を露呈する. そして近年は, これらの概念成立課題への対応として, “領域特異型 Grit (Domain-Specific Grit)”が提案される.

領域特異型 Grit はスポーツや教育, 第二言語取得学習 (以下, L2) など, 各領域に特化・限定して情熱や粘り強さを測り, その領域特定の行動継続や成果の説明を試みる概念である (Teimouri et al., 2021 ; Mosewich et al., 2021). 学業では一般 Grit より学業 Grit の方が成績・課題遂行を強く予測し (Clark & Malecki, 2019), 教職では教職 Grit が新任教師の効果性・定着の差異を説明する (Robertson-Kraft & Duckworth, 2014). また Cormier et al. (2019) はアスリート学生に対し一般 Grit・アスリート Grit・学業 Grit を測定して, アスリート Grit の高さを確認した. さらに Teimouri et al. (2022) は, L2 における Grit の領域特異的測定法 (L2-Grit 尺度) を開発し妥当性を示した. つまり, スポーツ・教育・L2 における領域特異型 Grit は一般 Grit よりも, 一貫して業績 (GPA など)

の予測因子として優れている (Teimouri et al., 2021). そして, 領域特異型 Grit では誠実性との名称の違いによる誤謬が生じにくいことも指摘される (Teimouri et al., 2022). 以上を整理するように, Teimouri et al. (2021) は「領域に特化した Grit 測定は予測妥当性を高め, 領域差や言語差をよりの確に捉える」と述べる. このように Grit の概念成立課題に対しては, 領域を特定した概念化と測定が有効な対応策となり, その予測妥当性と概念的独自性の確保に繋がる. Grit の概念成立課題と領域特異型 Grit の台頭を踏まえると, 他領域への導入においては領域特異化が相応しいと解釈できる.

3.3. ソーシャルワーク領域における Grit 研究の現状

主要データベースや関連学術誌を対象に「Grit」や「ソーシャルワーク」などのキーワードを用いて関連研究の探索を行ったが, ソーシャルワーク領域において Grit を主要変数とした実証研究はわずかである. 近年, ソーシャルワーカーの Grit とバーンアウトの関連を検討した量的研究が萌芽的にみられ (Bryant, 2025), Grit がバーンアウトの抑制要因となる可能性が指摘されている. ただし, この研究はバーンアウトなどの心理的健康指標に焦点を当てたものであり, 実践継続や成果への到達との関連を検討したものではない. 加えて, ソーシャルワーク領域に特化した Grit が測定されているわけではない. また, Molakeng et al. (2023) は南アフリカで児童領域のソーシャルワーカーを対象に質的研究を行い, 職業的 Resilience を支える基盤的要因として, ハーディネスと Grit を位置づけている. しかし同研究では, Grit 尺度を用いた測定は実施されておらず, 概念的言及に留まる. 加えて, Social Work Today では Markowitz & Pollack (2021) が, ソーシャルワーカーが制度的な障壁や困難に日常的に直面するため, Grit が実践を支える重要な特性であると述べるが, これは記述的論考で科学的な検証を伴っていない. その他, 学生・初任者・長期実践者といったソーシャルワーカーの主要なキャリア形成段階における Grit 研究も探ったが皆無に等しい. 例えば, 初任者では Kinman & Grant (2017) による Resilience 向上への介入検証や Lăzăra et al. (2025) による離職意図の規

定要因の分析、長期実践者ではCook et al. (2024) の職務継続要因の分析が行われているものの、いずれも調査項目に Grit は設定されていない。

なお、他の専門職では看護領域において Grit の研究蓄積がみられる (鈴木 2025)。これは看護領域が実践成果の可視化や評価指標の整備が比較的進んでいるのに対し、ソーシャルワーク領域では実践が多義的かつ成果の測定が困難なため、研究が遅滞した可能性がある。また、多くの職種で Grit は重要となろうが、ソーシャルワーク実践は支援関係の継続性や長期的介入を前提とする点で、特に Grit との関連を理論的に検討する意義があるといえる。例えば、ソーシャルワーク実践の中でも、困難事例へのマイクロ実践や組織を変革の対象とするマクロ実践においても Grit は関与すると想定される。ただし、MSW の領域ではマイクロ実践はほぼ必須で、そこへの偏重がみられるほどに実践が普及・定着している。また、今後の MSW の「主戦場」は病院組織を超えて「地域」であることが強調されている (二木 2019 : 61)。よって、マイクロ実践や組織を変革の対象とするマクロ実践以上に「地域・社会活動」に焦点を当てた Grit の検討が優先課題となる。なお Grit は、長期的な関与の持続に焦点化された概念であり、動機づけや Resilience と比較しても、地域・社会活動の実践文脈との理論的適合性がより高い。

総じて、ソーシャルワーク実践 (とりわけマクロ実践の中でも介入領域が広大な地域・社会活動など) は、特有の実践困難性を有し Grit を要する領域にもかかわらず、その研究の進展が乏しい状況にあり、重要な検討課題が残されている。

3.4. Grit の倫理的課題とソーシャルワーク領域導入の留意点

Grit は逆境下における行動継続や成果への到達を支える魅力的な内面的要素であるが、ソーシャルワーク領域導入には Grit 概念の倫理的課題に関する注意が欠かせない。

3.4.1. 未統制な Grit によるバーンアウトの助長と構造的課題の不可視化

Grit の構成要素である「情熱」には「調和的情熱」と「強迫的情熱」があり (Vallerand, 2015)、後者は「や

めたくてもやめられない」状態を生じさせる。Lang & Hines (2024) は、強迫的情熱の高いリーダーほど健康悪化・組織文化の悪化・離職意図の増大など毒性を生じ得ることを述べる。このため、Grit の強迫化を伴う量的増大はバーンアウトに繋がる。八斗・菅原 (2024) は大学生アスリートを対象に、Grit の構成要素である「粘り強さ」とバーンアウトの構成要素である「情緒的消耗」の関係が U 字型になることを示した。すなわち、Grit が低い場合にも高すぎる場合にもバーンアウトのリスクは増大し得る。これは、Grit が量的増大に伴い強迫的となりやすく、健康を害するリスクが高まることを示唆する。一部、Grit がバーンアウトを抑制し得ることを示す研究結果もあるが (Bryant, 2025)、バーンアウトにより離職した者は調査対象に含まれておらず、Grit の強迫化が顕著な層を十分に捉えきれていない可能性がある。

次に、Grit を過度に称揚すると、問題の原因が個人の努力不足として理解され、組織・制度の責任が個人に押し付けられるなど、低賃金・過重労働・差別といった構造的問題を不可視化させる懸念が指摘される (Schnell, 2026)。構造的課題の不可視化は個人の努力ばかりを求める規範圧力を生じさせ、自己犠牲を美徳化し、十分な休息の取得を困難にし得る。ソーシャルワーカーには自己の健康を保持し続ける専門職責務があり (日本社会福祉士会倫理綱領 2020)、過重労働の回避や適切な休息・セルフケアが行動基準に挙げられるため (日本社会福祉士会行動規範 2021)、これらは専門職倫理と矛盾する。

3.4.2. Grit のソーシャルワーク領域導入の留意点

上述のように Grit は、その強迫化や過度の称揚によって実践者の健康を損なわせ、実践の持続可能性を脅かす。したがって、Grit は単なる一方的な量的増大が望ましいのではなく、環境条件との相互作用のもとで、強迫化を回避する質的成熟 (=「健全化」) と量的増大が並行して進む概念として捉える必要がある。こうした解釈が可能なのは、Grit の性質が環境条件との相互作用の中で変化し、強迫化や過度な称揚が伴うことで倫理的課題が生じ得るためである。例えば、環境的に実践成果のみが評価されるならば、努力の持続が苦痛

と認識されやすく Grit の強迫化を招き、バーンアウトのリスクが高まる。一方で、実践プロセスが後押しされ、そのプロセス自体が評価されるならば、努力の持続が意味ある学習経験となりやすく Grit の強迫化が抑制され、実践継続を支える要因として機能する可能性が高まる。すなわち、Grit の量的増大自体が倫理的課題を齎すのではなく、努力の持続がいかなる意味づけのもとで維持されるかがそれを左右する重要な条件となる。Grit の健全化とは、努力の持続が強迫化を回避して肯定的な意味づけのもと維持される過程を指すが、それが努力の持続への認識を苦痛ではなく意味ある学習として維持し得るため、Grit の量的増大に伴う強迫化を抑制しバーンアウトのリスクを軽減する。そして、環境条件を前提に Grit の健全化や量的増大が可能と捉えることは、Grit の過度な称揚や個人の努力のみに対する責任帰属を回避し、構造的問題を不可視化しない。

このような観点から Grit のソーシャルワーク領域導入にあたっては、環境条件との関係を踏まえつつ、健全化と量的増大を統合した Grit の形成（＝「最適化」）を基盤とすることが求められる。

こうした Grit の形成（最適化）は、幾つかの内的要因と環境条件によって支えられると想定できる。まず、3.1.で確認した「状況適応性」は目標や行動を状況に応じて調整する特性であり、Grit の強迫化を抑制する内的要因として機能する可能性がある。ただし、ソーシャルワーク実践では権利擁護の観点から、安易な目標変更が望ましくない場合があり、「状況適応性」は Grit の強迫化の抑制要因として過度に強調せずに、実践を柔軟に進める補助的な要素として扱う必要がある。加えて、従来から地域福祉領域で強調されてきた「プロセス志向性」（白澤 2015；大橋 2022）は、目標固執を和らげ努力の持続を「苦痛」ではなく「学習」の継続に転換させる点で、Grit の健全化を支えると予想される。このとき、実践者自身が実践の意義や手応えを丁寧に見出す「個人のプロセス志向」は、Grit の健全化を支える内的要因となり得る。そして、チームや関係者が小さな前進を共有し、意味づける「評価としてのプロセス志向」は実践者を環境側から支え、強迫的な目標追求を和らげて Grit の健全化に寄与すると推察される。また、自己効力感は努力の持続の判断を促す Grit の量

的増大要因だが（Xinxin et al., 2026）、ロールモデルからの代理学習・メンターによる承認などの環境条件により形成される（Bandura, 1977）。これらの環境条件は努力の持続に係る適切な判断を支える側面を持ち得て、Grit の形成（最適化）への関与が予測できる。

以上を踏まえると、Grit は内的要因や環境条件の相互作用の中で動的に形成（最適化）される概念として捉えることで、倫理的課題との直面を回避し得る理論的枠組みへと再構成が可能となる。

4. MSW の地域・社会活動と Grit の理論的統合：Grit 概念の導入のあり方

4.1. 問題の再整理と新概念の提示：動的最適化モデルとしての「地域・社会活動 Grit」への再構成

本稿は、MSW の地域・社会活動の実践困難性と Grit の概念成立課題、倫理的課題の交差点に着目する。

すなわち、(A) 地域・社会活動には特有の実践困難が存在し Grit を要する領域にもかかわらず、実践に則して理論化されていない点、(B) 一般 Grit に概念重複・尺度脆弱性・予測妥当性の不安定さが指摘されている点、(C) 未統制な Grit がバーンアウトの助長や構造的問題の不可視化に繋がり得る点、である。

そこで、上記の交差する三つの課題を乗り越える概念として、動的最適化モデルとしての領域特異型 Grit = 「地域・社会活動 Grit」を提示する。この新概念は、まず Grit を地域・社会活動に領域特異化することで、一般 Grit の概念成立課題を克服しつつ、地域・社会活動の既存研究における理論的空白を埋める。地域・社会活動はその実践困難性ゆえに「情熱（興味の一貫性）」と「粘り強さ（努力の持続）」が不可欠であり、その実践構造と Grit が想定する行動様式は構造的な同型性を有すると考えられる。具体的には、①複数主体間の調整を反復する過程性、②成果到達までの長期的時間軸、③中断・停滞が生じやすい実践環境といった特徴が、いずれも Grit が要請される条件に該当する。このため、地域・社会活動への領域特異型 Grit の導入は、地域・社会活動の継続と成果への到達に関する説明力を高め、その普及や定着に向けた道筋を拓く。

次に「地域・社会活動 Grit」は、MSW の地域・社会活動に対する (a) 情熱（長期的な関心の維持）、(b)

粘り強さ〈反復的調整への耐性〉の2因子構造であり、環境条件との相互作用のもと動的に形成（＝“最適化”）される内面的要素と定義される。よって、これらの（a）と（b）は単独に機能せず、その最適化を支える（c）内的要因（状況適応性・プロセス志向性）と（d）環境条件（プロセス評価・承認・ロールモデルなど）との相互作用の中で、その機能が規定される（図1）。

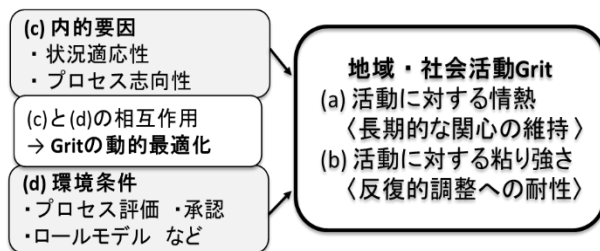


図1 動的最適化モデルとしての地域・社会活動Grit

つまり、（c）と（d）の相互作用が（a）と（b）の性質に影響を与え、バーンアウトの助長や構造的問題の不可視化を防止するように貢献する。すなわち、動的最適化とは、Gritの質と量の向上が内的要因と環境条件との相互作用の中で倫理的課題との直面を回避するように調整され続ける過程を指す。

したがって「地域・社会活動Grit」は、Gritの性質を含めて多層構造的に再構成された領域特異型Gritであり、MSWの地域・社会活動の継続と成果の到達に求められる内面的要素や環境条件を方向づける規範的傾向を有する。これらの構成要素は、既存のGrit尺度の領域特異化や心理的指標との組み合わせによって測定可能性があり、今後の実証研究によりその妥当性の検証が求められる。

4.2. Grit概念の導入における環境条件との対応

「地域・社会活動Grit」は地域・社会活動の継続と成果への到達を支える内面的要素であるが、地域・社会活動の継続と成果への到達においては、環境条件との相互作用が前提となる。環境条件を前提とするスタンスは、Gritの倫理的課題への直面を回避するため、ソーシャルワーク専門職の責務遂行と整合する。しかしながら「地域・社会活動Grit」には、環境条件との相互作用が前提であっても実践継続や成果への到達を

MSWの内面的要素の観点から捉える理論的意義がある。この点は見落とせない。さらに「地域・社会活動Grit」の導入は、実践継続や成果への到達に求められる環境条件をGritの形成（＝“最適化”）の観点から明確化し得る。この環境条件の明確化とそれを踏まえた環境整備は、Gritが引き出されない環境整備によって生じ得る地域・社会活動への「拱手傍観」を防ぐためにも不可欠となる。

5. 結論

本稿は、MSWの地域・社会活動の実践困難性とGritの概念成立課題、倫理的課題の交差点から、動的最適化モデルとしての領域特異型Grit＝「地域・社会活動Grit」概念を提示した。これは、MSWの地域・社会活動とGrit概念の二領域に横たわる理論的断絶を架橋し、双方の限界を補完的に乗り越える理論的枠組みとして位置づけられる。特有の実践困難性を持つ地域・社会活動の普及や定着を巡って、従来の環境整備中心の議論から脱し、内面的要素との相互作用の観点から、実践継続と成果への到達を支える新たな理論的視座を提示した点に本稿の意義がある。

特に、Gritを無条件の成功特性として捉えずに、その性質を問い直し、動的に形成（＝“最適化”）されるモデルとして再構成した点に本稿の独自性がある。すなわち、本モデルはGritの単なる一方的な量的増大を規範とはせず、環境条件との相互作用による健全化と量的増大の統合に基づくため、実践の意味と限界を見極めながら地域・社会活動への関与の在り方を調整し続ける傾向を持つ。したがって、Gritの倫理的課題であるバーンアウトの助長や構造的問題の不可視化を回避し得ることを示した。加えて、地域・社会活動の継続と成果への到達には環境条件が重要となるが、Gritとの相互作用のもとでその形成（＝“最適化”）を支える観点から環境条件を明確化し、環境整備を行う必要性も併せて論じた。

今後は、測定の精緻化、形成要因の解明、形成への介入設計と検証、実践継続と成果の検証といった段階を踏まえて、地域共生社会の実現に向けたMSWの実践を支える実証可能な理論装置として「地域・社会活動Grit」を発展させることが研究上の課題となる。

文献

- Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change. *Psychological Review*, 84(2), 191–215.
- Barrick, M. R., & Mount, M. K. (1991) The Big Five personality dimensions and job performance: A meta-analysis. *Personnel Psychology*, 44(1), 1–26.
- Bryant, M. (2025) A Quantitative Analysis of Grit and Burnout Among Social Workers' Well-Being, Franklin University, Doctoral dissertation.
- Clark, K. N., & Malecki, C. K. (2019) Academic Grit Scale: Psychometric properties and associations with achievement and life satisfaction. *Journal of School Psychology*, 72, 49–66.
- Cook, L. L., Carder, S., & Zschomler, D. (2024) 'Being a Social Worker ... It's in My DNA': Retaining Experienced Child and Family Social Workers—The Role of Professional Identity. *Child & Family Social Work*.
- Cormier, D. L., Dunn, J. G. H., & Causgrove Dunn, J. (2019) Examining the domain specificity of grit. *Personality and Individual Differences*, 139, 349–354.
- Credé, M., Tynan, M. C., & Harms, P. D. (2017) Much ado about grit: A meta-analytic synthesis of the grit literature. *Journal of Personality and Social Psychology*, 113(3), 492–511.
- Datu, J. A. D., Valdez, J. P. M., & King, R. B. (2016) Perseverance counts but consistency does not! Validating the Short Grit Scale in a collectivist setting. *Current Psychology*, 35(1), 121–130.
- Datu, J. A. D. (2021) Beyond passion and perseverance: Review and future research initiatives on the science of grit. *Frontiers in Psychology*, 11, 545526.
- de Ridder, D. T. D., Lensvelt-Mulders, G., Finkenauer, C., Stok, F. M., & Baumeister, R. F. (2012) Taking stock of self-control: A meta-analysis of how trait self-control relates to a wide range of behaviors. *Personality and Social Psychology Review*, 16(1), 76–99.
- Disabato, D. J., Goodman, F. R., Kashdan, T. B. (2019) Is grit relevant to well-being and strengths? Evidence across the globe for separating perseverance of effort and consistency of interests. *Journal of Personality*, 87(2), 194–211.
- Duckworth, A. L., Peterson, C., Matthews, M. D., & Kelly, D. R. (2007) Grit: Perseverance and passion for long-term goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92(6), 1087–1101.
- Duckworth, A. L., & Quinn, P. D. (2009) Development and validation of the short grit scale (Grit-S). *Journal of Personality Assessment*, 91(2), 166–174.
- Duckworth, A. L., & Gross, J. J. (2014) Self-control and grit: Related but separable determinants of success. *Current Directions in Psychological Science*, 23(5), 319–325.
- Feraco, T., Casali, N., & Meneghetti, C. (2023) Adaptability and grit: Foundations for their joint contribution to students' academic and nonacademic outcomes. *Mind, Brain, and Education*, 17(3), 175–184.
- 八斗啓悟・菅原大地(2024)「大学生アスリートのグリットとバーンアウトの曲線的関係—線形関係との比較—」『スポーツ心理学研究』 51(2), 50–62.
- 林祐介(2023)「保証人問題についての地域活動を阻害する要因の特性と実践課題—医療ソーシャルワーカーの地域活動に焦点を当てて—」『医療と福祉』 111, 56-2, 47-57.
- 林祐介(2025)「医療ソーシャルワーカーによる保証人問題の解決に向けた地域活動についての量的研究—日本医療ソーシャルワーカー協会会員への質問紙調査より—」『医療と福祉』 115(58-2), 9-18.
- 堀越由紀子(2022)「ソーシャルワークは制度にどうかかわるのか—いわゆる狭間の問題をめぐって—」『ソーシャルワーク実践研究』 15, 63-70.
- Jachimowicz, J. M., Wihler, A., Bailey, E., & Galinsky, A. (2018) Why grit requires perseverance and passion. *Proceedings of the*

- National Academy of Sciences, 115(40), 9980–9985.
- 金野伸雄・柳原里枝子(2019)「Grit in Foreign Language Learning: As a perspective of English language learning motivation in Japanese university students」『比治山大学紀要』26,45-52.
- 加藤大輔・塩路直子・池田朋広(2021)「医療ソーシャルワーカー業務における地域活動の定着に関する研究—希望する在宅生活の継続を可能とする地域医療体制の構築に向けて—」『日農医誌』69-5,516-524.
- Kinman, G., & Grant, L. (2017) Building resilience in early-career social workers: Evaluating a multi-modal intervention. *British Journal of Social Work*, 47(7), 1979–1998.
- 高良麻子(2017)『日本におけるソーシャルアクションの実践モデル』中央法規出版.
- 厚生労働省(2026)『医療ソーシャルワーカー業務指針の全部改正について』.
- Lam, K. K. L., & Zhou, M (2022) “Grit and academic achievement: A comparative cross-cultural meta-analysis.” *Journal of Educational Psychology*, 114(3), 597–621.
- Lang, J. M., & Hines, L. (2024) Can leaders’ grit and passion spread organizational toxicity? University of Phoenix, Center for Leadership Studies.
- Lăzăra et al. (2025) Retention and turnover in social work practice: what role do trusting colleagues, overtime, and workload play in job satisfaction?. *Journal of Social Work Practice*, 39(1), 21–36
- Markowitz, M., & Pollack, D. (2021). Social workers are paragons of true grit. *Social Work Today*. https://www.socialworktoday.com/archive/exc_120721.shtml
- 水野基樹・川田裕次郎・飯田玲依他(2008)「モチベーション研究における動機概念に関する理論的整理—McClelland の所説に基づいて—」『千葉経済大学短期大学部研究紀要』4,51-61.
- Molakeng, M. H., Boonzaaier, E., Truter, E., & Fouché, A. (2023) Hardiness and grit as drivers of South African child protection social workers’ occupational resilience. *British Journal of Social Work*, 53(5), 2499–2520.
- Mosewich, A. D., Dunn, J. G. H., Causgrove Dunn, J., & Wright, K. S. (2021) Domain-specific grit, identity, and self-compassion in intercollegiate athletes. *Sport, Exercise, and Performance Psychology*, 10(2), 257–272.
- Neisser, U. (1976) *Cognition and Reality: Principles and Implications of Cognitive Psychology*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Netting, F. E., Kettner, P. M., McMurtry, S. L., & Thomas, M. L. (2012) *Social work macro practice* (5th ed.). Pearson.
- 日本社会福祉士会(2020)『日本社会福祉士会倫理綱領』日本社会福祉士会.
- 日本社会福祉士会(2021)『社会福祉士の行動規範』日本社会福祉士会.
- 日本医療ソーシャルワーカー協会(2026)『医療ソーシャルワーカー業務基準』.
- 二木立(2019)「地域包括ケアと医療・ソーシャルワーク」勁草書房.
- 小畑美穂(2021)「医療ソーシャルワーク業務の変遷：個別の生活問題を社会の問題としてきたか」『評論・社会科学』136,45-85.
- 大橋謙策(2022)『地域福祉とは何か — 哲学・理念・システムとコミュニティソーシャルワーク』中央法規出版.
- Perrow, C. (1967) A Framework for the Comparative Analysis of Organizations. *American Sociological Review*, 32(2), 194–208.
- Reamer, F. G. (2018) Ethical dilemmas in social work: Macropractice. In *Social work values and ethics* (pp. 170–207). Columbia University Press.
- Robertson-Kraft, C., & Duckworth, A. L. (2014) True grit: Trait-level perseverance and passion for long-term goals predicts effectiveness and retention among novice teachers. *Teachers College Record*, 116(3).
- Rogers, E. M. (2003) *Diffusion of Innovations* (5th

- ed.). New York: Free Press.
- Schnell, E. (2026) When Grit Becomes Burnout: Understanding the Limits of Resilience. The Bailey Group. <https://thebaileygroup.com/when-grit-becomes-burnout-understanding-the-limits-of-resilience/>
- 白澤政和(2015)『ケースマネジメントとコミュニティマネジメントの連結によるソーシャルワーク論の確立』平成27年度 科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究) 研究成果報告書.
- Stoffel, J. M., & Cain, J. (2018) Review of grit and resilience literature within health professions education. *American Journal of Pharmaceutical Education*, 82(2), Article 6150.
- Stryker, S., & Burke, P. J. (2000) The Past, Present, and Future of an Identity Theory. *Social Psychology Quarterly*, 63(4), 284–297.
- 鈴木茜・嶋津多恵子・野尻由香(2025)「看護における GRIT の概念分析」『国際医療福祉大学学会誌』30(1).
- 鈴木智子(2022)「地域住民との連携・協働により社会資源を開発したソーシャルワーカーのプロフェッショナルコンピテンス—実践から導き出された専門職の能力—」『社会福祉学』 63 (2),56-69.
- 高泉一生・中田美喜(2023)「医療ソーシャルワーカーの地域活動の抑制・促進過程に関する一考察—地域活動開始前後の業務状況の変遷を辿って—」『医療と福祉』 112(57-1),5-12.
- 竹橋洋毅・樋口収・尾崎由佳他(2019)「日本語版グリット尺度の作成および信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』 89 (6),580-590.
- 田中千枝子(2008)『地域に貢献できる医療ソーシャルワーカー—保健医療ソーシャルワーカーの地域活動の現代的意味 —』『医療社会福祉研究』 16,71-78.
- 田中千枝子(2010)「第3章第4節 業務の内容—メゾからマクロへのソーシャルワーク」社会福祉士養成講座編集委員会編『新・社会福祉士養成講座 17 保健医療サービス第2版』中央法規,101.
- 田中千枝子(2014)『保健医療ソーシャルワーク論 第2版』勁草書房.
- 田中千枝子 (2017)「第6章 地域に展開する保健医療ソーシャルワーク—メゾレベルを起点とした連携実践」『保健医療ソーシャルワーカーアドバンスト実践のために』中央法規,297-320.
- Teimouri, Y., Sudina, E., & Plonsky, L. (2021) On domain-specific conceptualization and measurement of grit in L2 learning. *Journal for the Psychology of Language Learning*, 3(2), 156–164.
- Teimouri, Y., Plonsky, L., & Tabandeh, F. (2022) L2 grit: Passion and perseverance for second - language learning. *Language Teaching Research*, 26(5), 893–918.
- Vallerand, R. J. (2015) *The Psychology of Passion: A Dualistic Model*. Oxford University Press.
- Xinxin Li, Ravinder Koul & Yiming Cao (2026) Investigating the relationship between social support and grit in mathematics learning: the mediating role of self-efficacy. *Current Psychology*.
- 吉川雅也(2016)「モチベーション理論における主体性概念の探求：組織における主体性獲得のプロセスに着目して」『産研論集』 43,115-121.